俳諧一義集

後編

二

伊地知文庫
文庫20
355
8

文庫 20 355 8

伊地知氏書冊

俳諧一葉集遺稿之部

古学庵佛兮
幻窓湖中 編
坎窩久藏 校

一格子入て格を出る時を狭く又格に入る時を狭くはなれ格に入格にしてそなたの自在を以て詩歌文章を味ひべき向上の一路を求ひ修行を四海に発てうすべし

一手業不易一財法

一代門の句八彩色のごとし系門の句八書法のごとくすべしはなれてこそ彩色のあるべきなれば他門にかくしてさきを望べきなり

一先人ハ地をよく調へし おもふ所を述て 趣向を変て妙を
上手ハ作りこむ所に おもしろみあり
一筆談俳諧第一に吟味すへし
一古集撰集にすれたるを見て手本とすへし
一宗門の風体を定むる事尤第一也 時に応して音韻条々の清濁の
日積みの心にて 甚だ信し越説すへし 其句ハ時代く
をも考へし
一初心のうちハ句数をも重ねるへし それより姿情をわかち大
山をうえて向の様へ下る如く案すへし 六尺をこえんと欲する
ものハまつ七尺を学ふへし 其詞ハ心言にかなふ詞を我句に入やすき
んハ早き時ハ古人の胸中を知ることなし
一俳諧ハ中人以下のものとしつかはれるハ俗談平話をのこし定むるなし

俗談平話をもちゐんに雅ならさる物ハ上は作りかへて俳諧に元
ある ハ俳諧まさるへし 俳諧ハ万葉集の心にして 和歌ハ貴人も賤も
とれる味ひを是も唐明すへて中華の豪傑にも説くことを
知らし 只作の心やまさりを恥とす
一まつ手をとりあとを求むハまつは第一の要也 是ハ先哲の作を味ひ
一字も麁末にするかくへし 句の姿ハ青物の小扇をうるれ
まろうてよくおもておもしろ激風にはやまりても作しらぬ情を心
毫かくかを見んと如の月を観すへし 附心ハ詩月秋に梅此
ままへあてよくするへし
右の條々 祖翁の口決なり
一義人翁すいぶん案くハ定説ハ宗祇の詞をわかちいやされぬ
体ひいつらを指さしめ詞ハ作り御いはれぬ句に花の念し

翁かくをみちひて旅せぬ人ハさびしき思ハ先ハ柳ハ若葉を
翠らすれハそれて室こつくりたハ好て柏わもを墨子し
秋気苦の枕引かくつゆくと旅うて夫かのしられ枕く
汁たり笑ひつくで泥々しくつく杖を力ね賀良ハつのれ
こゆく／＼くせいふ代亦ハ室画を尺んとを日けと又狡けし
きて行う泥や蝶帰こ此雲をわくれ残ハ眼とつ出をもして
情れむねもあり旅ハ猿生の末つのさか月坐てりけしきとて
笑ゆれ一とさ大和路ふまけ入てお返ヶ物ゆ芒をもつふれ勿の家
ようけそらちらくつし御のしのやとそうふんとまくのす村
鶉森ていそか眠て山ハいくしかこしくろ路すをよく似する
すぬとゆおはひたくすむかうの墳子叢蒼のおくつらくぬく
哭らしうさるを兄て

芳渉く宿かりしころや萩の花

引さ句おもりひさる哥よふこれくおもゆこれくのけしきを
旅の実花としいさん

一 秋のはしめ先さいやさきて猿の曲りぞの屋ハむくと見ゆ
秋ハこてすうさおもそうしけふうす錦葉あのくみけちるりのか菅
方子浴しさゆのさ勿のか狗折紫桜の枝をもちれかうさ屯行
すしふさち古気を読る窩の日錦葉やくふけしまとの入
家よく人の知られハ千代の名句ともいとんされとも我句のけき
をしるて京今此句の光ゆらとし

いれつきや閑の方ゆく五位の声

一 山里ハ笑菜おそし梅花
翁をうく此句をもわくふれし千反辺行子此句を亮二義子多季

へくひ出里ん風きく梅の花すなお業のきとふんとらふと座
しとやかけまらふん又六里の梅さくへこらす男来衣の奉めるす
よもと泉まけりしふ谷や竹ふん翁ゆ之縁ゟきをのとくまくて
古事の水無月五條ゆうらを通りさかす娘すゆや一の行く
看板を並ばはくらんの此家ゆくとし記すま体ふもちをつり
まつてくやくらんの菓子家くへつとし汝き家ひ休まし其のし
こまへしへはくらん病ゝ賀とやまとかき

一　翁尚白子まのかなり坊りしハまつ花の花ハこれ小町がかしと付句
久しきよそ趣向ゆりくをしくべひ入居句とふろうしとか
をや花合の席をし坂ひとり尺ゆけて杖ゟまのかまと
云る句ゆり是まつそとやひとへをハたましく小町の姿ゆれと
句中の実を彩まりとう一千年標準の思ひ言きむし

ふかくさのとしいふとなれハなれしはよくうつすらの句
を付るこれを深艸の少将ゟ句もその姿を述べさせ
とゝ云ふ家の字と云ふ俳中の花をもとめ二字よくまめぐ
於ゐるハしるしなし

一　今年貞享の古式をゆるし晴好の新句を訳をし新し生たハ
ゆゑし芭蕉庵の物すまひ文章ゟ取花兆をとなくのゆし
又其ハ月の花の坐を定るもの也

賦五ヶ條

一　月花　　一句
一　出合　　去嫌
一　短冊　　打越
一　留香　　泳剛

一諸礼　　俳止

芭蕉庵桃青判

一諸礼俳止

一出合を近但寄先

一一句一立　宝月花一句

右三ヶ條書式也

芭蕉庵桃青書之

行脚掟

一一右ハ所々ニ而ハ寺ハ再右ハ樹ハ石上ニ所ハ

ハ所ニ而ハ石ハ所ハ

一旅ハ笠ハ物の命ハ所ハ

一君父の警ハ所ハ何ハ天ハ

見ひき情ハ所ハ

一衣服ハ財ハ

程ハ所ハ

一魚ハ獣の肉ハ所ハ食味ハ所ハ人ハ

他事ハ所ハ茶根ハ咬ハ百事ハ

ハ所ハ

一人の所ハ所ハ句ハ所ハ宝ハ省ハ

ハ所ハ説ハ所ハ所ハ

一所ハ俳道の説ハ所ハ所ハ命ハ

中魚ハ所ハ

一ハ所ハ義ハ書ハ所ハ一枝の枯枝ハ

一舟に酒を飲んで饗應するを固辭して、かくこの微醺
のみを止めて、既におうなるに、松果の戒めを聽き
用ひて破を取らず、先人の酒を惜むべきなり。
一船物系代をたづねて、ふるひ
一代の短を尋ねて、もう長を取る。
ほうこれ甚しいや。
一俳諧のお稽古する人、ふるひ教師を求めて、
一女性の俳友を求めて、もしふるひ師を求めて、
吐を求めて、歌会を八人をすすめて、侍の二人、地方男女の色八闘を言ふ
ものを、ふるひ流儀すれば心教一ふるひ山道八主一学道をして
ものを能おのれを有べし。
一主ふるひ物八一枝一草をもふるひ山川江海をもふるひ

ほうこれ
一山川四海をもふるひ入れて、新しき私の色を付けるもあれ
一一字の師恩をもふるひ、ものの一句の理をもふるひ
きれ人の恩をもふるひ、人を教へ、己を教へ、海の
一一句一枝のもとおろそかにおるもふるひ、やうやうと又婚姻
もふるひ、形のもとの人八世の奴しけそれ入るの八代を
人を文をふるひ
一名を思ひ見をおもふ、且芳の師をもとも八ふるひ、
ものふるひ人を学をもふるひ、ものの一きはしされ八跡をふるひ
はをもふるひ思ふ、ふるひ廣食をもふるひ
右の海ふるひ系門の形脚八性をもふるひ、尚ふるひ大をもふるひ性の稜
をもふるひ御する俳客一人を外一不を廻て学をもふるひ俳を

利休の好ミを侍をさして無きよる所なしといひしや或ハ
古人か名をなす事も只一すぢのよりどころをいひしハ誹
千筆硯をうけて物角を尖の境として初心の幼者を導し

一 蓬莱にきかはや伊勢の初便り　翁
菖涼川より書来ハの文にいはさるべしの語はなかりしやハ侍
るやうし書来る物又ハ古への便りといふに伊勢のしたまふハ元日の
式のをやさしふかふの神代をいひ出で便りにあやしき祖師の
うや胸中をさゝぐるのなすみる侍れとや翁近ごろ
此事かの事をさしく今日神への祈しくそかなる事をおもひ
わくの誠信和尚の詞を使ひ神の一字を冷し清浄のうつくしき
を蓬莱に対して詠ひてかをとし

一 からさきの松は花より朧にて　翁
伏見の任口上人の論ありて其角かこたへし八雲にかゝる所も以て八雲
発句にてあらす留の事を嫌ふ事を云ハ句切追れハえしられ侍
るとし是九こそ留の事ハ其角か翁に問ひ又是ハ其才三すに句とし
いふ発句とされけしまゝや夫来の是ハ無盡偶なれし発句
とかく拗ひけし其三ハ句要渡る月句要渡らまんハ
其二字にふん翁更に曰其角夫来の翁されハ理屈として
只花より松の朧にしてをかしかりしのみとし
一 辛崎の松は花より朧にて翁曰方寸の中に心を
我しいさゝみやまの入江に詠よなしひとつの言の葉を
とりて他只眼おもてされそさせれり
一 或人此のからさき此句に切字なくて其角に問て其角

白雲と切字のてにをはなくて句の中にて
菊日和八切字のてにをはなくて雲の出
なくて只服部の言葉画きなるとも先数これ
ありてこれ白雲と云ふ立てるてにをはの
言葉なくてしかも

一　ゆくとしをいとはぬ人とをしまれる

菊日尚白く新しく近江八景波を分て
とうぬいて分ける本を尚白の新味なり俳諸紙
としてまたまた始めて俳句今日の事なれば
菊日とのべて古人と共にあらずまたおつことをさし
ならひ吉本氏一言四十字撰し行事を直ちに
此歳のおしまるを此句さハまるを此情ふ

風雲の人と蕉翁を慕ひ来りて菊日和八よりに
風雅を論ずるものと結文を収ひまひらう

一　此本戸口　孫のさし紙さ　此月　廿六角

紙衾裏根の対句を古れたるこれの月と星物し
付るもの応議の月を初五文字はよりこと
等の戸と後の菊日いてるあるとなくぶくを白ぶくとも
此角を定を入集をつ年作大はもの菊の文を等の戸を
ゆるし此本ゆしの多色二句を大切なれハたるく如板と乃
ともいをふゆるもしとしんなを此本戸等の戸さを物
外一吉本氏角を等の戸とよりくれハ高を等の言色し
元と俳門をつしをくれハ千風情のゆるれを物書を
いふ付る外言を角ゆるを物ひらをしを

一　[illegible]　猫の恋　我人

菊は白と伊勢とを本とす俗情ゆゑの一ふし
[illegible]
[illegible]
黄白相ゆれども変ずる事なし初て本性をゆかまほしん
[illegible]

一　本[illegible]に二つ以上の咲ちらう　萩子

本[illegible]　[illegible]

[illegible]本を二つ以上咲ちらしたるゆゑ[illegible]
[illegible]菊を本とす二つ以上咲ちらしたるゆゑ[illegible]
[illegible]菊は白八[illegible]を以[illegible]
今俗のごとく白と黄とを[illegible]

[illegible]

一　菊は白を伊勢の[illegible]義の[illegible]　萩子

[illegible]菊は白を伊勢の[illegible]
[illegible]
[illegible]

伊勢　杜若

[illegible]

日[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ふるしひけるとなんて今の誹に直しては入句なしくるとも

一 おく揃ひしくれのえ此もり 郎 野水

籏ひの撰の時古来此句ハ秋の比をと撰ぶにつるいひやすけよりも同前し入集しからん翁曰此句の類きとしらぬもの迄未さ誹の中のほとくさけいヘしらんかにかなとも船とかなるのとあるの名と誹も猶加へ翁曰句のなるかなもかねいかしハ一句にて勅撰の名ならふしかは入ハ入ぬし撰者の心なるへしとも詳にしれを深く侍る

一 其ち書故風花前登に趣なぬ 越人

翁古来に諸て同発句ハ前花をされハ其の句ニ詳ふかし越人句頭に前花ときと又風と八文字み也此花の時句故帳を前書に趣すると心よれる有新翁調なきと置てかやの

発句とも申へし世上かくるぬるとも其の代々引つけて字足形し侍る哉全く句を撰ぶにいはゆる句も改めて前花を専らせおいてハ手法のなまそこまて慶とあへのらひと

一 振翁やこいかれ直す古手の鏡 古来

古来此句ハ予の思ふまゝ似よる五文字古鳥帽子残名おれとるしてら京物ハいは心徹をらに除すまし やはり一やの類ハ誹の本と今の誹を直て翁ひくれハ翁曰五文字かり心を出て直ハ侍誹の人の書やなるへし 十分と云と振前をもて思こゝへりとなされしとて

一 四の花の外里法といのく堂の乱 百手

此句初ハ翁の谷たるて 凡かりの句も籏ひの撰の時ん凡かりこ此句又前形に除へし 古来是に四つに直して侍ひゆくさるみ

光悦の筆の手も風姿ありとし此ゆゑに翁曰此句ハ
香ひろき俳諧の途中の句にも見るに似るものなれと真
しき此句ともなさんとし論ず方手の句となるべからず
大事をおさへんハ年かいがふなれ　凡兆
一 元の七文字なるべし至る古来の句も古来なし此発句季なれ
しき俳諧之先祖ともいふ花ハ諸人の世々をと切し古来の物
まれなる道ありし古人ハ花をおしむことをもたちてゆかんを惜く
人をうらみ山桜をゆかしむるもしき命のさきに及ん
猿と真ハ卯て事の敵なしといふ深更なるかん俳諧
辯へ又ちがひ翁の論ずる翁曰そこうハ俳諧の和歌をもはらにん
ともある香や凡兆大事を辯とす翁曰まさに此一句をもて
の敵ひしくと至るもの也と大笑ひしつきのゆくゆく

一 ふみ踏も用ゐらる花の奥　去来
翁曰花の奥とハおなしくなれど名所なりや古人も素のままに社
中結れともくもと細工しさぬる挑むてさへのふれとして
一 月雪や祈らむ名ある甚し色　珍人
猿らの根の付去来ぞ須々俳丹の句を備ふかなしらしと
ゆるされや許ちかふことなり珍人の句入集めの侍らん翁曰
月雪とハ云ひつる一句をさへ言の尽しとさへのも風姿ありつ只志
純ちはゆるさるれやとぞ二つをとかく八格ふくさまれども珍中の俳諧を以
ふき趣向をも俳名を以句をかかるの侍れハむかしき悪ありつ下し　又
うきぬて折もあらんとし
一 きしれる笠をよくしつ雪の路　其角
去来師を斜して其角ハ諸千化老もし侍る川の雪の吟

付るとも我詠の句ハ三蓋さんとゝ沈日さのうかれハ定家の心
なりさしてとゝ外ぶすとゝしくゝつゝ為ゝとゝ
詠詳ある手ゝ

一　をゝつひとゝの山ゝの花さう　古来

られハ様らの二三年以前おの吟し菊日ゝ句を人ゝ
手ゝ(ゝゝゝゝ手ゝ杜ゝ)ゝ芽吹ゝ柳ゝ
さゝ春ゝの文ゝ歳ハゝ秋ゝ花ゝ山ゝ成ハゝ
ゝ月ゝに魂ゝ
年ゝゝゝ句ゝ
ゝゝ吟ゝ作ゝ
ゝけゝ今一句手ゝ
ゝゝ

一　為ゝ　泉郎ゝ　菊

様らの様の対ゝ句入集ゝ
ゝ小舟ゝ
なゝゝ
対ゝ
てゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

一　月ゝ　古来

菊上海の対ゝ
ハ立の方ゝ

いろ〳〵ひろく世ゝを本とし句を案じ山野を尋ね侍るよ
岩間より又ひとゝ雫言を尺付ゝとすれば曰こゝろ
の深みとなのれと先のゝもゝろんこゝろいくはくの風体をもめ出し自
称の句とおもふ人しも句八系と称せしさ筵のふみ入ゝるゝん
古本ゝ手ゝ趣向八格二三字ゝとゝ侍ゝ知んゝの文を以ゝれ八
かし格式の筆ゝ侍ゝ過ゝ考ゝ手自称の句ゝ所ゝ侍ゝ八格ゝ
め殺ゝゝ侍ゝ句ゝ面ゝ侍ゝ十位ゝ侍ゝ花ゝ
ゝ侍ゝ知ゝ侍ゝ筵の小文八師の自撰の集ゝ侍ゝ
ゝ尺ゝ草稿ゝ侍ゝ迷化ゝ侍ゝ侍ゝ八ゝ侍ゝ
句ゝ集ゝ入侍ゝ句ゝ曰系門人筵の小文集ゝ入句ゝ
おゝゝの八ゝ侍ゝ侍ゝ分ゝ侍ゝ

一つゝゝ言ゝ句ゝ言ゝ由　文章

菊翁雅俗の高下ゝ人ゝ知ゝ侍ゝ俗の句ゝ侍ゝ今日ゝ系門の句
一字の句ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
句一句ゝ文ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
雅ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
侍ゝ知ゝ侍ゝ

一　二字句　春つひ上れ　春の雨　凡兆

句神ゝ冠ゝ菊ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
凡地下ゝ差ゝ言ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
ゝ侍ゝ句ゝ八系二段俗ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
ゝ侍ゝ八ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
句ゝ俗門の人ゝ侍ゝ八ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ侍ゝ
ゝ言ゝ句ゝ文ゝ言ゝ言ゝ言ゝ言ゝ言ゝ侍ゝ

一

あのさしみ窮屈ゆく方やかの月　吉来

此句を何人か翁に見せしに吉来ならんと言ひ出せり
乃ち吉来に問ふに然りと答へ侍る故の事なるべし
やがて吉来の句なりしを知らざるもの多し知らざ
れば何人か問ひて聞くべし人麻呂の詩歌おくる義の高
きを以て人麻呂の詩歌を人麻呂の詩歌と称するの
如くに吉来の句を化せんに文字の称あるべし一句
なれば何れ吉来なるべく無しめれども人に許すべ
き事なれば吉来に授ける時は部屋なるべつるを
の如くの同業なるいとも称ずべきを忘れるべ

一

吉来は芭蕉の門に行きて長崎の人の句
芭蕉の門の会見を一筋嘱まるべきを自ら

自ら許すべき句なれば芭蕉自ハ初のごとく曙くやしく云ふものなれば
ともし文殿の如くに大ち此頃なるものを吉来ハ芭蕉に
作るべきを知らざるべ作るべきを知らざるべ
作るべきを知らざるべ

一

芭蕉上京して吉来を伴て曰此時芭蕉の集を此句にて
入集しけんとし吉来に多猶の十分に吹き聚寄よく
て作るべき句なり芭蕉の詩歌を編集して所に張
すべきと作り如き芭蕉に於て所に張
すべきと作り如き芭蕉に於て所に張

一

身何とぞ吉来の句を芭蕉に対の句を芭蕉
ひとりぶりしかるべき吉来なるべ功者なる

[illegible]や[illegible]と十分に[illegible]と[illegible]一物
[illegible]と句の上に[illegible]と[illegible]句[illegible]

一　泥龍や苔代水は[illegible]　史邦

[illegible]の[illegible]千[illegible]本[illegible]と[illegible]
[illegible]風[illegible]
[illegible]

一　[illegible]に[illegible]れハ[illegible]　宗次

[illegible]の[illegible]宗次[illegible]一句の[illegible]
[illegible]句[illegible]一[illegible]の例[illegible]
[illegible]と[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]

一　玉柳のおくにあ[illegible]や　[illegible]

[illegible]ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]玉柳[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一　[illegible]やすみ　[illegible]

[illegible]句[illegible]

たしかに他へいひしを試て此句を経し　てのちなりけれハ又是をも
よく見し大笑ひしたまひぬ

一 つかみあふ子供のたけや麦畠　　游刀

凡兆曰此麦をかけハ麻畠もかけん去来曰麦ハ麻にて叶ひ
くれと論する翁曰又よかの論かしましかしまし其角もかくと制しあへ
るうへ人衆さりよ

一 いそかしや沖の時雨の真帆片帆　　去来

去来曰猿みのハ新風の始め時雨ハ此集の眉目なるに此句仕そ
こなひ侍る只有明や片帆にせまる時雨哉と有らハいそかしやも
真帆も其中に籠て句のはしりよく心の粘りすくなからん先師曰沖の
時雨といふも又一ツ　ことはりあれとも句ハ各別に勝侍らし

一 兄弟の顔見合すやほとゝきす　　去来

去来曰此句ハ五月廿八日の夜曽我兄弟の五郎十郎今をかきりとの
泣ける所をやつけんとしけるに光源氏の須磨の物語有ける
を思ひよりて式部か文ひとつふたつ[illegible]かくして一句を作りたる翁
曰予か面影をかへしぬ[illegible]一句ハよく来ぬといふ事を作らハ女角か評を同お
かうして淀川より陸しまふ事なる此句ハ心ほそさて詞ふとなし去来か
心付して詞ふる[illegible]ハ惜らかなさ[illegible]をきりし文字の今の
俳諧ハ[illegible]

一 みれと釣りてむしろふ　横雲
　まうそる鈴ちる此咲て紅　　去来

去来曰此附ハ其前の意をよく付侍る付ものにあらすの説
[illegible]
て附事侍るや去来か鈴やとの去来に採輝てなりしを秘

付けたるとなく人々さまざまの奇異をつけしかども何れも皆
此のしてん後ろ〳〵と思ひ〳〵して付置一付きと中菊田神の
ウカノ八三十樹あるべし行方付きたるとなく今の天文字
うるうるうる

一　梅　手すさめ　枝の百　吉末

これハ茶屋の根じ菊原川うえ梅曰ハ二月の春もしを吉末
千七ひ涙ろ茶屋の服ケ用ひうとかん

一　舟　行方　西　むの　ろ　茶屋の白し

海い流千長さ七ろ舟ハ白ろ出きをうけうと吉末流ろ伊吉菊田
てハ長帳ろしきウきふひ付ろ見ホハ長帳し出ろ〳〵ふて菊かしひて
上京の対吉末西ろ〳〵ハ白ウ伊ろ千長帳ろ付ろや菊田舟の中ろ〳〵ろ処
ウ、ろ〳〵西のろとろ流ろ〳〵ろまかろとなん

ろ張此角さ〳〵もろ有の中　吉末
吉末西ろハ白ろ長ウ帳ろ付ろや菊田ウ長帳ろ付ろ角ろ
張ろいろ千一白ウ中ろ

一　ろい　ちう　菊ふ　まろ　ろ　ん　北

ろめハ茶ろん流ウ風茶のろ中〳〵ろの菊田きろ〳〵ろふん
と白張ろいろ千ろ二白ウ千ろ〳〵ふん一白なくてろろのんんかろ千
ウろ〳〵

一　夢　ふふ　きろ　ハ　身を　菊ろ　す法　吉末

初ハきろふろろろえて流ウ心菊田吉末西ウ人ウ流ろろ〳〵ろ流ハ
初ろろ白ハ決めろろものウろ同ろ〳〵ろなろて流ろ決めろんろるものろろ

一　法ん　とめけ　ろ　法の　茶ウ　ウ

決ろウろかふもウ梅のかろ〳〵ふ　ろ　菊

山おろしの白雪を吹きまぜて木の葉を散らす白雪
はなほ白しとをこそけしかく付るべし

一　くろうして高き樫の木　は　森
咲花をちらさんとて門を入り　箱
此おろしの白雪を吹きまぜて木の葉を散らす白雪
をとをこそけしかく付るべし
白しとをこそけしかく付るべし

一　綾　北　初雪　つさうの家
はしくちらさんとて　吉来
山おろしの白雪を吹きまぜて木の葉を散らす　箱
白雪をとをこそけしかく付るべし
好春を上箱の松をとをこそけしかく付るべし

おろしと盛す

一　ふるいけやかわず　秋　正義
中さんしゆ中きりゆくこ有　新
正義春の朱立しはめて竹板を敷とおもふ千自然さと
付付るべしと菊の花は谷所のひろう世秋菊吉来
地翠春とこの世を菊口と秋くしめて正義春と今を改定ふ
れは我白は香ふくしと菊口と世恨すくふるし千上我白と
白は美枝をとるべし秋早くもすくすくと一枝の花のいくらく
ゆるしは我白千時をとるべし
風雅の孝しを無千付るべし秋我白をもとる正義息服を
す二つをとるべしとをけしぶやの春をもとるべしの
第三付るべし白のけしをもとる松ぶんを赤踏のうまれるとおもふ

[illegible]

一　[illegible]

[illegible]

一　[illegible]

[illegible]

一　[illegible]

[illegible]

[illegible]

一　[illegible]

[illegible]

一　[illegible]

[illegible]

[illegible]

一卯七字歌の句ハ切字の数を定ル

[illegible]

一卯七字歌の句ハ切字の数を定ル

[illegible]

とかく一通りハさる事なれと花鏡第の花紀なとしるされ
やうかりよる花やかりといふやうなる和ゑ季ふとも咲ぬ
そのうちにしと思ひ待るも湖曰されハ古ハ四季のうち一季
花様し決らさやうと有なるにハ諸ぶにもかくも他よへし
されと若草の桜としハ新なる桜なかんとし季気きらう
雖一ヂんか咲かるとかれハ句家をなつと咲ひ
すへき

一 卯七秘訣に蕉門にも発句一句にても挨拶ハ第一なり 去来云季
はるかさらの事湖曰古ハ発句の句ばかりを賞ふ 勅撰ニ句以
上書句となるこれ礼式の法也 一句にても挨拶ハ大切の発句な
挨拶なきハめでたしとし 一説に発ハ落陽和会の句なれハ
一句にて挨拶をせされバ大切ニ挿甲に而も一句

まれても挨拶といふ事ハ大切なる事にて候なれ紀中し昔ハ発一句
なれハおもての紀先ハ云ふに及はずの事とも挨拶をして又五十韻百
韻とよミても発句なけれハ一巻とハいふべからずと細とすかく
大きく大切なる所これ発句にあつしこれハ二句一体にてなれハ
章とし却て歌中発句なれとも又多くハ発句より句ありて
おもく一巻を不知其中なれハ此所に発句なくて付句なるべき時ハ
二句か発句をも立へし付句とするとき時ハ其ひきを付けても一句をたて
挨拶といふ句にても作るとて是をまつよく発句をも懐紙にもる
おもてに所ある物の季を句作ハおもてにあくる作れとも丈ハ季寄
なてともまた俳諧の上にかるくもかる事当にてあふ志のれともそれ
古人の風人ならてとをまめてのれ此俳諧の作しはてするん
ならぬと思ひ侍るのミ

一卯七云、連句に有明と有月と用ひ侍や。去来云、此句は洒堂
が深川の会に有明の句あり。曰、有明書たる句中に有月は
秋に月の句さへ誹るへしと直に有月と用ひさせし句面に
月を見るといふへしと也。ねとも有次の月の字を入てとしと云
一歌仙に東武の会に名残の釈教と嵐雪是を難す。翁
曰、名残と釈教ハ正月ハ神祇釈教すこしにても去来ともかくさし
なれハ退きを恐れて此句の去嫌も侍らん一句に釈教なく
とも既に名を出す者ハ釈教なるへん中に見えとこそいはれしへ
と云事とし
一翁曰、要上の俳諧の文ハ尺あるか或ハ漢文を編名に和らけ或
ハ和歌の文字に漢字音を入て余情しく云成し
或ハ人情をいふとも今日のさのしよとはしをかし持てまめ

西鶴か俳ましくらかね姿ゆへ余流の文字ハ風しかるとて紀貫之て
之文字ハたゝ漢字をかなにて書く事をはふへつけ句ハ歌
俗の字物ふとも句ゆゝしくいふへしとも
一翁曰、漢和の発句ハ世の漢字にても此句と見し伴侍に作るへし
和けの漢を定家の経にても其のまへの発句をも杉高にて用ひ
侍らんハ拙なるへしとも
一翁曰、俳名ハ何か字も乱の字にもよはひ只呼へ清く調ひ字形の
風流なるを用ひへし短冊なとしたため尺ある所の名乗を侍
りとしもよくいふへし人の代ハ仮名字をしたゝむ
自得なりとも又変のため名をはしめ風俗とうけたると級
又の時ハ字ハ名字を用ひへらしるゝ翁の前にてとゆかくすとも
一去来云、翁の長の寸法はいづれは竪ハ表紙の三分二をとる横ハ五分

一ことより侍るとやらん猿みのゝ附句の事なにくれなく見えたり
一無所之句と云るは古来より季を定たる発句をさして句の内に
季を取て只侍る古来の季寄にもれたる季と無く只物詠するにあらす
ひ用ゆへし句は季寄の一つを撰し新しきらんは俳無きよしと物し
とりあつかふへきの故に古来の季寄にしるしたるよしと見えたり雪月梅
日なれは又季よりて定て可用る句を作り侍るとし
一古来の俳諧集の撰者はやくく俳諧集のうちより作すへし好
句つまり集の跡を見て一句と名を撰すひなかの作れし事は
集め古の詠に有りて安きの中に入れりしやさしく一句曰俳諧
事の名は新しき詩文史録物語和文ちりに俳諧を見へしと云く
されハ先人此の名付かふさく見ゆるにみ蓑三の月と花の名の
ひさこ猿みの翁の松原筏田水大に取りての其むかし浪化集

の附る残滴とみ山と号す句曰これ和歌片歌所なれハ実にも
ハし浪化集と呼へしとそ
一翁常に曰上手宗因なくんハ我々か俳諧今以貞徳の涎をねふる
成し宗因ハ此道の中興開山なりと云へり
一翁曰今の俳諧ハ日々に工夫をし席に臨てハ筆をとらす吐へしとそ
平生よくよく心得へしとし
一古来之句ハ門人今千歳の不易にて因熱取し成ハ天下かくるる
てあるをもつへハ平手にして示しけるハ句とさの念を入るものに
以ふ又一句ハ手つゝく俳意ふしを作るへしとしん也さへ一句続き
十七字一字もおろそかに思へからす俳諧ともさまの手和歌の一錬
なり一句平をとらまいかて作るへしとそ
一翁曰発句ハ殊なりすへしとそ云ふし来るを上ふと得翁洒落子

義て曰義白八世うて人物三三ハ分葉う知とゆるひこうるとまのく
くくちてくくてくく
一詩云ふ義白八五合をものし箱曰られ仕とるゆゆと人
をしくひやとし
一古本云ふ曰句子自然といふをくハ文家の法う体知のゆうたとくハ
ふうをくくく小歌をふうとうとうと白とおゆくてくふ歌を薄
と仕れハ白芸のゆうくとしを本云て紫仕ようくやしも曰
古人とうを物やおまゆんとくいるをやとし
一箱曰義白八芸をうくさんしかくく仕れて仕白八三変子出れうむ
うしハ仕ゆをゆとすゆ中仕ハ心仕をゆとゆとくく今ハうつう郷青慶者位
を以仕ををををををを杜年云いうゆうとと郷青慶ハ鈴とハくくや
古本云文考おゆうゆをうゆを見をあをををくくを

いひをくくを文ゆの法をゆけて法う仕ハ押て初くく
赤人　社為て法てゆれゆ神のをく　史邦　古来
ゆをくをいつつ合点ゆくくく
ゆ曰ゆつくくをゆゆゆをうやゆに古手本三十椿をゆう
れうを走てくゆを悦ひうひうをくおくハゆゆひくうを
うつうくをををいうう白化のゆやをくのくめくのさう
ひなれハ冷歌自知の対ゆうてくさくくゆもうくくくを白
ゆ赤人の方をゆくくゆやくゆハうをくさひつう書をゆう
くを仕くをくを為て法うれうくくくを合点ゆくくくを
おくつつゆくをゆゆひくうくくく郷青ハ社ハひくくくくを聖ハ
くれ椿を銀ち遠をくくくくくくくくハ
身法うき古刀社及才をくを

[illegible]

一　[illegible]
いのちうれしき　極楽のさと
[illegible]

一　[illegible]
[illegible]

一　[illegible]
[illegible]

一　[illegible]
[illegible]

一　[illegible]
[illegible]

一　[illegible]
[illegible]

一　[illegible]
[illegible]

一　[illegible]
[illegible]

一　[illegible]
[illegible]

化し給ふんや菊曰古今の風俗五七年ごとに又一変
なるべしと
一文革曰長歌短歌ともに始まりてより和歌曰歌のごとしと
雖ども漢詩を学ぶ時は平仄押韻を学ぶ古今集
より後長歌短歌ともに廃れ八代集に至りて古今集
の短歌のみ残りて長歌は絶えぬ其の因縁は古今集
より後人麿の長歌なく人麿の長歌は不決の作八代
集の撰ばれし短歌と云へども人麿の長歌八代集に
漏れ三十一字の長歌と云へども上古の歌八雲
なりしに長歌の作載せ中れり三十一字は俗語の長歌
及歌よりも長歌の歌よりも短歌成八雲一
代成八二首と云へども長歌は三十一字の短

歌と云へども八雲に載せたる長歌は名目ばかりの長歌
長歌と云へども長歌と云へば長歌は名目ばかり
なる三代集以後代々の撰集も三十一字の短歌不書
同じく古の歌八雲に載せ長歌し後の歌八短歌も唐土古今代
といへども賛之ハ代々の文章しかるに短歌の新と云て詞
書ッ長歌ばかりなるに長歌を捨て短歌ばかりを選ぶ
誤りなるべしと云へども短歌ばかりを選ぶ
勅撰八代集に長歌を捨て短歌三十一字を長歌と定めしは
驚目なり
一西行曰歌人は古今三代集を祖本とすべきなり無
なるべき歌は三代集を学ぶべし例へば学ぶ和
歌曰香を焚ばかりの人の香を聞ばかりの人の香を聞

定家と降を作ることと繁之弱恒ることよりかれるなるべし

一 西園寺の古今集よりかれぬ古今集ばかりしかれぬ人をしかれぬ

花わかんこんまを千しらあぬもの吹うる一集を以こそを撰す

一 集一代者千かやうのの俗ゆるんの菊曰繁之のみるこをけと

えしようかもしのるすハとの人いきしかをとをるハきしハすと

こしらしまえこしの詩をもたる拾の俗ゆるやいつそれ文章の

歌撰千杜子美ハ為ものしそうをそ詩人のまゝ鏡とやるん

詩ようおくこうるのようとて世詩をあつれとこれしう

一 本節 問本詩の意人ハ詩をるれ菊曰面白と強念の右大臣

をふん

一 未そ以の古今集ハとなるかるれ菊曰定家ハ以

のなら西部ようとの西とのそハ定家卿の深刻意のふん

一 或人問古今集の序に六義を説季吟俗詩千六義をそうい

を義ゆるれるるの花菊曰ゆるて六義ハ詩のるるをおの義

ろしるるハ詩ふ一撮の学ゆるれハ知ゆるいまを六義伊達

ゆ説千ゆるふ季吟ふ曰しる季吟をそを述る者の

俗しをを千の詩素朱る季のゆの答を詩るしたまふ朱を俗

ようるを義をくをるもん歌の内千俗詩無ハゆるもん歌義をを風雅

るも引ふ義るの義をるの歌おるを見をいくさるの

海をゆるもの六義の詩詩を歌るのるるを

おくをを義をたくを俗ようを詩ようを説をおるのを知し

おゆ歌ふるゆるるるるを詩ようを説ゆるるを

の二ハふるるるを詩ようを

一素堂云今の人高くよりもり栄集詩として俳諧ふることをよむ
人ゆく末の集八詩の三百篇のごとし　毎世の作哉ものつくるに
詩ハ古今の能ゆく詩ハ詩の体又俳諧ハ是を用ひくて俳諧を慶安ハんやうれを伝て見れハ世ゆく
世集詩をよめるハ和歌の俳諧をしらんとやいはん古今
集八しら俳諧ハ是れハ巻頭の風ゆくとうハ俳諧をて和
ゆくとうハ古今集八世材をよめるやうし千体哉のごとし
くゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
詩清をよんへと事ハ一言を先蓋曰孔き学ばて俗を入
一卯七月上旬の作

芋ほりも洗ひまいらせ月の海
篇の大海ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

作ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
さゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
くゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
を立て作ハ作ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
一反歌の長歌ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
俳諧ハゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
一正東四海の中ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

俳文ハ[illegible]文の詩ハ俳[illegible]文哲の文を
[illegible]ハ俗[illegible]ハ俳文と異[illegible]
一[illegible]俳文[illegible]
西[illegible]例[illegible]事[illegible]文草[illegible]
[illegible]俳[illegible]
草[illegible]ハ[illegible]
一[illegible]ハ青物[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一式ハ古式ヲ倣ヘ
一[illegible]ハ古書[illegible]
一古俳ハ[illegible]
[illegible]
一[illegible]ハ[illegible]
一[illegible]ハ[illegible]
[illegible]
一俳[illegible]
[illegible]
[illegible]
右七ヶ條ハ[illegible]
一[illegible]俳[illegible]
[illegible]

ひとつとして百頭まるしゆをなすべし聯の字義と俳諧ハ但そこ
我ら業の変化学ハ今日世俗の上手しゝ系俳諧ハ世を用ゐ雲
文ハ法しゝふ見をハ一新しゝ字義をくゆふべし指ハ中
者の俳諧ひとし連歌ひも当くゝ世ハ
連歌ハ自を敬ふ俳ふ和ふて更ハ加れ
俳中ものしの俳諧も大うゝ世ハをしゝ利ハをかゝ
系俳諧ハ自のゆを知ふ物ふもをあら一句の上物ふ義今ふ
物の情を拾ふ知をさゝ世ハ先のうるはしく絵の栄
義の物ふ知の者ふ一しゝふ通ふもハ連歌と上ふを
句ふ者ふをふ

船つなぐいふはけふ法の上
海ハ上 ふ世ふ

と付ふふハ上ハよみて付ふ千ふ物ふ句ハの句ふを
ふふ世付ふを句ふ連ふ

物ふ
次しの乗ふ付ふ里のさびしさ
とハふ句俳諧付ふ

秋ふ
俗なふ物ハすさまじきふれ数

ふふハふの物ふ千ふふふふ
天ハ者れハ連俳のさうハ
四季を一句ハ物ふ付ふ
奇ふ似れふふ歌の物和ふ連奇ハ連奇の物ふふふ千安
ふふ連句のふふふふ連奇ふ俳諧ふ

俳諧とうつさうハ走て高きを拾ひぬかんとす俳諧
するものゝ走為手俳諧をしるとも言ふ俳諧をしるとも言ふ
ものハ俳諧をしりて俳諧をしるとおもひ

削ー　之　帆くゝ

とゝ白子

さまれうゝ俳諧　後ゝ次郎助

と生て成人ハ白俳言ハ俳さまゝの五文字ハ走為
俳諧ものゝ中ハ言葉ハ用ひさるの姿ハ俳諧ハ俳
ゝとしひて走ハ走ハ言の言ハかり用ひさるやと言
なるものゝ中ハ言ハ白ハ俳諧ハ物をかふ白ハ行ゝ
ゝて走俳諧

[illegible]　[illegible]　松本社谷の言

とゝ言ハ白俳諧ハ行事ハ谷かゝとゝ言ハ
行の言とゝとゝ言ハ俳諧ハなるゝ言ハ又

神　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

とゝ言ハ白俳諧の歌白ハ言ハ白俳諧ハ行ハ行ハ行

[illegible]

一泉の兒愛京武行の序より句後花手菊を詩して菊兵
えとの心持の本さの句をゆかりて花くさ
句のしらべ

[illegible]

よ仕きり菊の老亭の脇ゆうて[illegible]
と仕ふ[illegible]きり二の表ゆうつか菊の句千

うまし[illegible]

よ[illegible]句千兒愛

[illegible]

と仕方ゆう一句仕はとゆ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

是別稿をかくつもりなり古今の御とをくの世稚の時のかうハ法
ゝ[illegible]れハ更ゝ一句ゝ然ゝ[illegible]
火性の火いけを体をきつきを　丁蔓
とゝ然をゝ時ゝこゝ人ハ情を所ゝ[illegible]句をゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ一句をゝ前の句の法情し新新知るの[illegible]体ゝ
特拙しゝ句ゝ

一石　ゝ[illegible]　[illegible]　[illegible]　

[illegible]

[illegible]

以外をうたがふ人なし　秋郎

[illegible]

[illegible]

[illegible]

安くふ事をやとを若しの八条事をふとく見おゆの扶不
ゆとをまひすへ釣すとをとこと人を絡くの之ふけ句海代内
れ人をを年月のをもやとこ代表と男代
一歩雲間紫白をふゆつあ集似をといくるけ若の物へなくへなれ
翁曰ふれ早一きやくを秀上くをなくをとをるん歩をとをれ
をを多やをゆるをを集をふを物語かをこををくへ秀物
語くををとをきくすをやしを秀俳諸の中れ一きゆれ
うを貞徒ゆを年千人をの俳諸ゆくて宗因をて俳徒をゆを年
を年をを秀をを不の俳諸ハ千ををふくをふれくをををををを
秀考ゆれかを千徒人一をれのをなの一ゆれゆう徒人ゆを
こ集をて紫白の貞百徒ゆれをを物ゆれを紫白ハ貞て
ゆをくへれ白をふへ秀千をを代一を紫白ハくふくををん

能ををみをを迎一を今の一度ゆ風をくくをををを
をを秀ゆをくへを風をくゆを武ハ人くくを貞をとをを徒ゆ
れくをを孤屋野徒ゆをたをゆをををををををををを
ををををを秀をを能をゆををれハ酒を秀ゆを秀をををを
を貞を秀を秀ゆをれゆをを徒なをハ徒なをを徒ゆを
をの徒徒秀ををくへをををれをゆをを徒ををを
ををををををををを多ゆををををををををを
多徒の秀徒を広句集ゆをくへをををゆををを
貞をををゆを千集を徒をくへを徒ゆを貞を徒を
秀ををゆをくへれををれ三四ををゆを秀をを徒を
を紫白ハ二百徒ををくくを秀の句徒をの小冊をくくを集ハ
を風徒と撰者の心を合徒ををを秀をを徒をを

世一代集の対八女の手柔よりはじまる俳諧と歌仙と連句と俳諧と同撰なるべし此歌仙とても海集の下に記す所の文の文にて第子弟の文にて歌の集の集の人の句に集められ八女を以俳諧に対し侍りしかの歌仙の一巻の海

[illegible]

一秋の初八金城子名を[illegible]
[illegible]

秋初の七日のちのよさを弟[illegible]
しのぶをひて一枝二枝[illegible]
[illegible]
やうしをの音[illegible]
と一日のきぬ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
中とうけ[illegible]

[illegible]

一菊を採置て日の射わ枝の案内うけ世間の山おとし抜てひ
けきのもの千わ枝咲つ菊を八ひらの花のもとに菊ひ
菊をもしまを菊をもらうを拔しのひて見てとをさかり
千射わ枝の句千

菊をもて　かれつ菊を　ひ　れ

[illegible]の[illegible]無作と又一抜ふ[illegible]
一花菖蒲八江州大津のこおり母をもて[illegible]
ひとをもの[illegible]射菊の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

秋のいろめのうつりて音もなくうつる　[illegible]

[illegible]

[illegible]

一　諸意平小坊主のうや大根引　つゝ和
作らさるの日大根引ハ是ゝ手あらにして大根引ゝ
あ[illegible]ゝ[illegible]ゝ生ふ[illegible]ゝ
一　翁曰給ゝ[illegible]ゝ[illegible]ハ殺家ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
天竺ゝ[illegible]二人[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ

[illegible]ゆう桃陳をひいてさく八月九日深川の花をたくらるゆゑ
[illegible]の人しめし一社[illegible]桃陳浄瑠璃ゆゑ桃陳いとはるる
[illegible]貴白持をふりかくしいつもさそ桃陳[illegible]四五日
[illegible]

七月十四日の夜高岡金谷を過て火と天て越かう火井川
[illegible]
十間ばかりの橋[illegible]秋の風
うけてしのゆふれけきかし堀の柳
[illegible]いとうるる
こゝかしこ[illegible]
[illegible]
[illegible]大井川の白八千[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

他門にて許る一人も居候式説を門弟に説と云ふを通りて
し見る所に今日を去りと大きに悦ひの撰集と入る
と許る事度々人を事とし迷ひ申し絶えて事なし
つくし思ひ出ひ俳諧ハいひ絶と云ふ事なし
るの俳諧と晋子俳諧と人に対合とん見れば俳諧と許る俳
諧と対合すと云ふ式一定に力を入て戦協する事なし
されハ人を射所の作しめる事なし
伝と云ふ力を入る事なし
点と点を白百四五十句に事なし
云ふ所の白を濃淡の点句に
白句に出て点の基しまた白大に一点の
沙門に出て点の句に基しまた句に
沙門の句に出ハ晋子も沙門の句に
句かゆ〳〵てんたの

ふ式年完俳諧ハいひ絶し決定に作らし又問ふ事に俳諧し
晋子の俳諧と対合をする事に并沙門の風体と事の風体と
合をしすると迷ふ不審を申し
もし沙門に事ふ山中に
意義もしやと云ふ事に
うすく云ハ式ハ
俳諧の云ふ所白
と作ると対合をする
筋骨に名誠する
の句と云ふ
作ると晋子の風
作をと
云ふ対合すと中されふ又大に基ふ又問ふ事に

京高の俳諧の血脈を伝へんとせば、
四を正くして俗を変ずるを以て、退去する共
好事の旅亭に招く時、汝の新説を曰へ、光許より射して多
年の大望を遂ぐ、汝の言ふ所、ひ伝へ、
汝四方に流れ、この人を射て俳諧の定をなすべし、むかしあえて道指
此法を附さんと、其人、
を指す、又、人、八、
中きと思へ、これ、
定を八性卿、
人を、
流れ、
子良光、

事いまだ一二海内の人、
一なり是一方、
色欲の人、
三方、
さ、
人、
変の去、
文、
もの、
人、
人、
俳諧の
筋、
一門、
門、
門、

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一[illegible]八[illegible]

一[illegible]八[illegible]

一[illegible]八

[illegible]

一廿五日　[illegible]

[illegible]

一廿六日　[illegible]

[illegible]

一廿七日　[illegible]

[illegible]

一廿八日　[illegible]

[illegible]

一廿九日　[illegible]

[illegible]

[illegible]

一世角云菊の銘作手作者の此所ゝの見られまなうゝと毎年
のとくとくとゝ手溝きゝもうしきさかつきへゝ作ゝ詠めれ
八千年の気きとゝ吹乃ゝ脈ゝ流れ庭ゝ作ゝやうゝうゝみてう
き見ゝとゝ吹乃ゝ脈ゝ流れ庭ゝ作ゝやうゝうゝみて気作きゝ入ゝとくく
みうゝ式ゝきゝ作ゝとゝに仁四の表勅きゝ不ゝれゝと一ゝ百ゝいひ
ゝゝとゝのかゝとゝなゝとゝとゝきゝれゝ八千年法ゝとゝ

うゝゝゝゝうゝゝゝ枕さゝめゝく

雲ゝゝゝゝ八舟ゝ気ゝゝゝむ

ゝ作ゝれゝゝゝ三才図彙の詩ゝれゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一菊九千去て曰一寸のうちに黄色の三五ゆゑん人八仙老く
十日千歳ふ人八名人し
一詩六句法の和及ら牛子は葉とい了の本く千と仙佛とんと
を更也千みい

拾人は菊千こうけう 細代 うれ

ときうきしし拾人の拾ゆ千菊八ちへ咲と笑ふて花の改
なれ元合仕ちし叶ら菊千詩ちまく拾拾の
仕拾なと盛ちつし
一詩六句曰黄白と国之ちる八一花のおくさとも去る起す
つまるなくとて
一詩六句曰第五一日のお八きあるうと又曰第五しいい八
えとのうちうち叶のすし大方第五の白ちて八仙ちと宣了

一詩六句一ちて仕ちて行しう第五ひくて菊を拾ちく
ちて行て天子四ちち遥菊の仕ちて行ちを仕ちて天子
おうれちちくへうつて

人参は仕ちて行を吐中うん 桃陳
菊を 丹を きーう 成 菊

子を拾芝遥ちへ来ちちうちる財叶ちとかうけ手ふ
子うちをちし叶咲の一ちて行ちるるうて仕ちん八子念の
次半し勅さうと大山のちとりを八仙起ちて日ち後の
一ちを大ちは仕ちて更ちう満足かきうれ叶ちくーう八

次子の菊は丹きーう ふと
しあちうの対ちる日千ちうの子有て青の子なる伝て仙ち
ちうう次千の菊ちいちし八青ちと迎ーは れちと一ち杏ちを

と言て下られ候次ぎの嵐くくるかなされて白海次ぎの
嵐と新しく書て作れども舟きしるまとこの七文字を後れ
より上の七文字を尾鯛に成の一字の一字をしらべ行る
ものの外とりさハがらうれしく面くれを人これ聞とも
くくれる人ハ此方ハ肝をつぶすらいいかを八肝をつぶす歌の
みつく喜悲の差別をなく鮒の泥を強さうさ手取
ハ白しくみ一世のものとよ千秋庵の所のうといくも
世白しく故をみをよとと悟さとと言い作る
一能ハ言ふ言文言の所ハ白人ハ来て文言を本をいはと
李白ハ言ふ
はいとをおををけきとを白千久しく文言外
子菊千名作附子迷鮒舟やとを文言ハ所をくく成白

門人ハ言人しくめをれハ成附ハ白ん地ハ白千
言つむ上の和の和とハ白千文言を和ハ白鮒を費
しく華ハ下言やとハ言文言を作ると作ハ白し
区文言ハ作る人子宿易ハ白ハ白ハ白しく
しとをハ言ハ足退千書ハ白ハ白千鮒舟ハ言文言ハ文合を
物ハ下言ハ言ハ言ハ

[illegible]

一去年[illegible]人[illegible]誠[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一碁石の数は今詳ならず但し黒白ともに鳥金銀紙し
さみしられて碁の時の碁笥を取て碁盤の傍に置
碁を取て黒白に分ち碁盤の傍に置
なりしかども碁石の数は今詳ならず但し黒白ともに鳥紙は
紙にて作りしなり碁盤の傍に置
ものなり碁盤の傍に置
一古碁石は碁盤の傍に置
碁盤の傍に置
碁盤の傍に置

しかハ女房の詠ハ代々はやく人用ひられハ物の名
をやはらかにして和歌を主とするゆへ今の
世の人ハ世俗をつゝしみ天人夫婦の道
を守り侍るゆへ但表向〻ハ歌
道ものびそうの家門のはなれ
ハたゞ人〻ゝと言へり

一古歌をのゝ後世に前田利家公の
のゝ人ハ歌を詠ず集め至手紙を
はゝ誠ゝおもハゝしく今思ひ知るべ
歌ゝしてものゝみ家物家物の
ゆゝしく代なわゝ門人ゝゝ
ゝゝし又武州田舎の句を
必ゝ思ひなくゝ舎句ゝに

のみしつゝけて歌ゝ及ゝ
きゝ歌ゝ道のゝ人ハ分て世世の家臣ゝ
一松の句成俳諧ゝ前田主家ゝ
ゝ多くゆゝゝ人俳諧義
おゝ今松を新ゝ又一
世尽ゝすゝゝ
切切の役ゝ
一前田家ハ一すちゝ
一前田家を用ゝ
ゝふゝし八代集八古今後撰拾遺後拾遺
新古ゝこれゝ後古歌門依歌新勅撰続後撰二代を加て十
代集を家ゝ又堀川家度の代元ゝの家八十代の代の

集ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]集ゝ今の[illegible]れゝゝ[illegible]化[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

一[illegible]日[illegible]の[illegible]ゝ[illegible]光[illegible]白[illegible]千[illegible]白[illegible]筆[illegible]数[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

[illegible]

一文章の可否を文章の序と由序来序内序と云
三段の由ハ如何なる来ハ是より先のことを内ハ今
此内のことを云し序三段を一つにし跋ハ序と
なし序有て跋なく跋と序ハ不同し跋ハ序を新
為しくなるゆへ序なしくすることの如し序跋
なくて序号有ること云ふ七字七ハ其序の始し七文字

此の例乱て古歌に對ひて乱歌と宣古事を宣時ハ古事
此對歌ハ亦是生歌ハ亦おのれし對用者し紀ハ千年和ト
習ひ例ハ序跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ
跋ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ序ハ

新毒の物と姫て俗伝ても男女ハなりてし就中ハ若ふ
千おの人を殺すきるきてなりの新ハ用ひて百約一ても
こへうふとし

一去芳毒の泊述物の新級ていてうの白ハ表の内いて作ひへと
弱ふ好ふ菊白ていてうへ又やハてふふ級ていてうへ
ふとよ人の上ていハ少し西蕊し菊のさひ毒の新ハ若し
ふふてつ毒ていさうるりのふりて全くの食茶を約
寸の八月於ていて代人のうハとのふやしとし

一去芳毒ていてうふ古事ていて表て
ふてふふ又代の物の上ていかふ用ひるかとの白の新いて
作ふんと白して菊白大ふハ表てきふ物ていて中ていふ
てふれのふいつもとてふ物ひし河ていて白のトて

きふ菊ふのて持ふハ俗者清ふふひきふふ一向て新ものて
いひふふ方きふへしされふ
ふふ世ものてふてふ物ふされハ表の俗て物ふされハ若て若し
一去芳古今の人名おのてハ物にのてて作ふんて表て菊
日今の人の名ハ物てへ古人の名ハ物てふて若ふ
されてふふふへひきふひなてふてふれふ
一去芳惜敬千毒ていてうふ俗ていて表ふふ
叶ハきふふのふ物ハふふてふて表ふふ菊白ていてのハ知て大切れ
てし惜敬て毒ていて表て新代ふふ日本ハ中ふの俗し
毒ていてふふて俗ていて表ふし惜むへしとし
一菊白ていてハ新俗ハ三十六ふ一ふて俗ていて表ふ
少て改ハ古毒ハ俗ふひ中ふ

一菊日發句のすの八一すきたの浪なれハ和やハきをうゑすくゝ八雲はゆ
ゝまよ千ゆ法ゆゝ白姿ゝ雪くゝ位よゝ一ゝゝ花ゝすくゝゝと言ゝゝ
ゝ仕る古芳ゝ菊ハ恋歌の發句からもゝゝ和代ゝ
ゝくゝゝゝゝゝゝゝ又古来ゝ新米の舎ゝ樋ゝ桜ゝ
文の時遊悼ゝゝゝゝ品科船中ゝゝゝ志ゝゝ浪風
おの新品ゝゝゝゝ不異の学一ゝゝ合ゝおゝゝ
めゝゝゝ發句のみゝかきゝゝ千ゝゝゝゝゝ
一菊日服ハ尊ゝのゝゝゝ芳ゝゝゝ無ゝゝ首尾ゝゝゝ
富發句ゝゝ言ハ必定ゝゝ接拔半一千發句ゝゝ服ゝ
ゝゝゝゝくゝにゝけゝ接拔ゝ付ゝゝ服尊ゝの句ゝゝ
ゝゝ和ゝ接拔ゝ重句ゝのゝゝゝゝゝ接拔ゝの心
なゝゝの新ゝ發句三月ゝゝゝ素物ゝゝ紹ハ紹ゝゝ出乖ゝ

一菊日發句千紹紙發句ゝ一事ゝゝゝゝ無ゝゝ紹ゝゝ
ゝゝゝゝゝ句ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ但ゝ紹ゝゝゝ雪一面ゝ
ゝゝゝゝハ紹ゝ無ゝゝゝゝゝ有ゝゝ品發句ゝゝゝゝ紹付遠
付歩源付句の新ゝゝゝ三冠ゝゝゝ第一發句ゝゝけて物合
ゝ千歩源ゝ付ゝゝゝ句中ゝ仕ゝゝゝゝ句ハ文
字居ゝゝゝゝ月無千ゝゝゝゝ使ゝゝ第一題
紹合紹ゝゝゝゝゝゝ紹ハ先發句ゝゝゝゝゝ
ゝゝんゝゝゝゝゝゝ紹ゝゝゝゝゝゝゝゝに
接拔ゝゝ紹ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ下
なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
を以文字句し付解句千做し韵とゝ

一菊日第三八大付て六月朔日に長寿の菊の酒を
酌て宴を催す式と考用を通じ称ひの如きの歳日
九月八第三八九月九日を大付と称ひの日二日を前分
後八月の九日を押付前分といつ伝かとの歌
又日ようて押付前分とは九月一日をもちんちんの歌
なり伝前分の歳日の第三ようを前分ようを見定
の伝かてきたとし花のさかりの日の定ひの歌しさかりて
定ようとしてようて通ふしてに歌ふして前分
きふ前分文字前分は前月朔日の古法日待ようてとし一
説古書ようハ脱の日翁字前ようの伝説ようの文字前ようの差分
やうと前ようす拙ようと人もし前八第三の文字ようし前ようの
八年人ようの学の前ようとの見出の習し第三八特

一菊日第三八大付て六月朔日に長寿の菊の酒を酌て宴を催す式と考用を通じ称ひの如きの歳日九月八第三八九月九日を大付と称ひの日二日を前分後八月の九日を押付前分といつ伝かとの歌又日ようて押付前分とは九月一日をもちんちんの歌なり伝前分の歳日の第三ようを前分ようを見定の伝かてきたとし花のさかりの日の定ひの歌しさかりて定ようとしてようて通ふしてに歌ふして前分きふ前分文字前分は前月朔日の古法日待ようてとし一説古書ようハ脱の日翁字前ようの伝説ようの文字前ようの差分やうと前ようす拙ようと人もし前八第三の文字ようし前ようの八年人ようの学の前ようとの見出の習し第三八特

こと前ようとの脱の日ようとの説附方の日の特
八第三ようし特ようて及ようとし歳日を特殊ある特し脱
ようて九月九第三ようの天見を特ようてようて
ようの説八

一四日月八ようの四日ようの説ようとして安くこの方をとしとし
前日おようの四日の説ようの説ようの説ようの中の説ようとさん
ようとし方事の説ようの説ようの説ようの説ようの説ようの説
花月の説ようとさんようとの説ようとの説ようとの説ようとの説
一菊日合日の七日ようの説ようの説ようの説ようの説ようの説
ようの説ようの説ようの説ようの説ようの説ようの説ようの説
説ようの説ようの説ようの説ようの説ようの説ようの説ようの説
説ようの説ようの説ようの説ようの説ようの説ようの説ようの説
説ようの説ようの説ようの説ようの説ようの説ようの説ようの説

一四月の事を云ふハ白の千ちぐさ桜ばなを花ばなつくるゆゑ
きこゆる俗説也其心なし代の白さくらを及ひ其ほかハ
是ハ秋の花とする説の白ハ秋の事用ゆる也花ハ
むつまじき業と書る称ゆゑ白ハ俗説也
一月の定まりなくて五十日ゆゑ
みてとかの無きなるものゆゑ俗ハ考へ
月の心月の字なくて今ハ説ハ意なり
仕方人しの作法なるゆゑ
一毎日月ハ上の白ハ月の白ハ説
下ハ月ハ月ハ秋ハ黄の用ゆゑ
ゆゑ説ハ秋ハ代者
と新式なり

一毎日ハ月ハ二つ月ハ説ハ月数ハ
月ハ花の下ハ花ハ
なるゆゑ

一古歌に牡丹の白金の又ハ一白の文ハ桜の白牡丹ハ
ゆゑ仕方正花ハ白ハ本ハ
の武ハ正月ハ武ハ又ハ月ハ
海日ハ月ハ花ハ
しなくくゆゑ正花ハ桜ハ
の花ハ白ハ
宇花の説代ハ百説花三
の花一ハ白一ハ説ハ
ゆゑ説ハ代ハ

一菊白雪一作のごとく和のごとくかろしとうたふみと無
りとなるべし
一菊の花白八仕立ようよりと古説ありて今一白に朱を一せ無之人
こゝろもとうたて集　至とも出て花白を年と事を白のすきあり
はなくして和の一作と桃季の白ひくハ桜白を菊さくて花白と
をとゝをとを惜むに白ひの花をうしを季を白をうしをとを桜
白を季をくさ季をくふけたをく季を白を及ひてをくていつ
きの季をうをくを桜白はけをうしを白をうをくをくをとを
一菊事ハの桜と門人叶ハの俳諧と同作日ハ花のうにをを
百変百化をうをうをとを境去を作の三をくをれて千三の
中をいをくを二をとを変をいをしをを和をうををあれを俳
諧をうをうをを作をうををををををををををををををを

悔をうをを作をうををををををををををををををををを
ををををを俳諧ををををををををををををををををを
一菊白俳諧を三合八をうを七合八俳をうをとをれをう
一桜先を俳をみをを俳句の特能をを和八本作をを句を
ををを俳桜句を程ををををををををををををををををを
次を梵をを五百餘年を以俳諧を立を世
きのふをを俳句をををををををををを京未
みをををををを白句の和
京未菊の学を新美をを句和をををを
是米五合をを和
の作ををををををををををををををををを
井戸のををををををををををををををををを

源氏ものがたり合せ八百万代の物がたりとしられつゝ
かゝる一代とて
ものがたりの物語の源氏の君の物語
一代とてこゝにしるす

訳完